

タキシラ南部の宗教遺跡

—カーラワーン仏教寺院を中心として—

早 田 啓 子

タキシラ全体(図①)を俯瞰すると、北東から南西にかけてハスラール Hathlāl 山脈が走っている。その南西端をタムラー・ナーラー Tamrā Nālā 川が南北にゆったりと蛇行しながら流れている。この川を挟んで、ハスラール山脈と平行して走っているのがマールガラ Mārgala 山脈である。タキシラの都市は北からシルスフ、続けてシルカッパ、ビールマウンド等二つの山脈が終わって平野に広がった先に建設された。また一方、仏教寺院はこれら二つの山脈の山奥に点々と存在し、山懐に抱かれるようにして建立されていたことが分かる。

タムラー・ナーラー川がハスラール山脈とマールガラ山脈から流れ落ちる水を集めて、東から西へゆったりとした溪谷を作って流れ下り、丁度ビールマウンドの都市遺跡にぶつかった所で向きを変えて川幅を広げながら北に流れている。カーラワーン Kālawān 仏教寺院はタムラー・ナーラー川を望むマールガラ山脈の北麓に建立されている。この川の対岸の北西 2km には、ハスラール山脈の南麓に抱かれたダルマラージカ寺院が建築されている。カーラワーン寺院からは眺望も良く、また要塞の地でもあった。この寺院は都市遺跡ビールマウンドからは 3km 足らずのところに位置し、マールガラ山脈が北に突き出した突端に建設されているのである。タキシラの仏教寺院の中でも最大級の規模を持ち、北インドでも屈指の大きさを誇っていた。

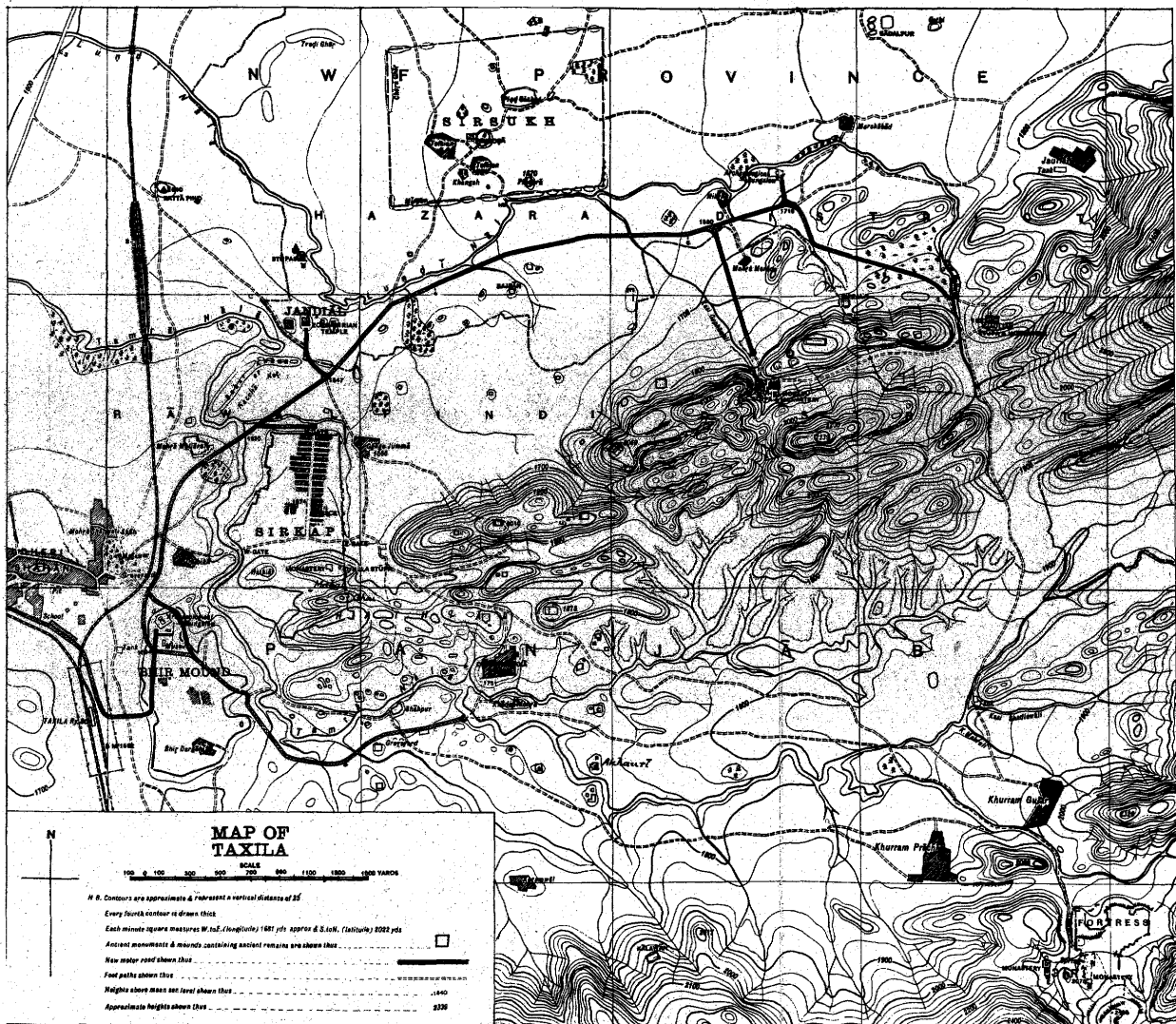
さてカーラワーンという名称であるが、最初はこのような呼び名ではなく、違う名称で呼ばれていた。それはこの地から出土した遺物によってその古称が判明したのである。このことについてマーシャルは次のように記している。

From an inscription found on the spot it appears that in ancient days its name was Chadaśilā, but no trace of this name has been preserved among the surrounding hamlets. To-day the place is known as Kālawān or 'the Caves', from the presence of three small caves in the hillside, which the farmers use for the storing of their hay and grain. 注①

これに拠れば、古くはこの場所が「チャダシラー」と呼ばれていたが、近辺の村々ではいつの間にか忘れ去られてしまったという。今日、そこはカーラワーン又は「ザ・ケイブズ」という名で知られている。というのは、丘の辺に三つの小さな洞窟があって、農民達がそこを干草や種を貯蔵するために使っていたからだ。「チャダシラー」という古称は失われてしまった。

これらの洞窟の近くのせり出した急な斜面に、一番大きな仏教建築を真中にしてその上下に縦に中小の建物が造られている。このような建物の配置は、通例としてよく選り抜かれていて、丘上で涼気を得ることが出来たし、北側の美しく曲がりくねった川や谷間の景観も望まれた。時に棚田で耕作も行われていた。

北西インドではいつも水の確保が問題となるのであるが、カーラワーンではどのように行われていたのだろうか。マーシャルは次のように説明している。



図① タキシラ全図

Water was obtained from a well which still exists about 130 yards from the western foot of the hill. The well is 11 ft. 6 in. in diameter with a stone lining about 3 ft. thick at the mouth. Carrying the water up the steep hillside must always have limited its supply, though it was doubtless regarded as a valuable exercise and discipline for the novices to whom this duty fell, and it may be that help, too, in this matter was contributed by the lay-brothers or others who came to pay their devotions at the stūpas. 注②

これに拠ると、水の供給は丘の西麓から120mほど離れた、現在でも残存している井戸から汲み上げて来ていた。地図を見ると分かるように、カーラワーン遺跡が建っている尾根は北に張り出しているが、その西側は谷になっている。その谷間から流れ出る水がタムラー・ナーラー川に注ぎ込んでいる。従ってここを水源とする井戸水の確保自体は、比較的容易であったと想像される。マーシャルによると、その井戸の規模は直径約3.5m、口は約91cmの分厚い石を環状に巡らせていたという。

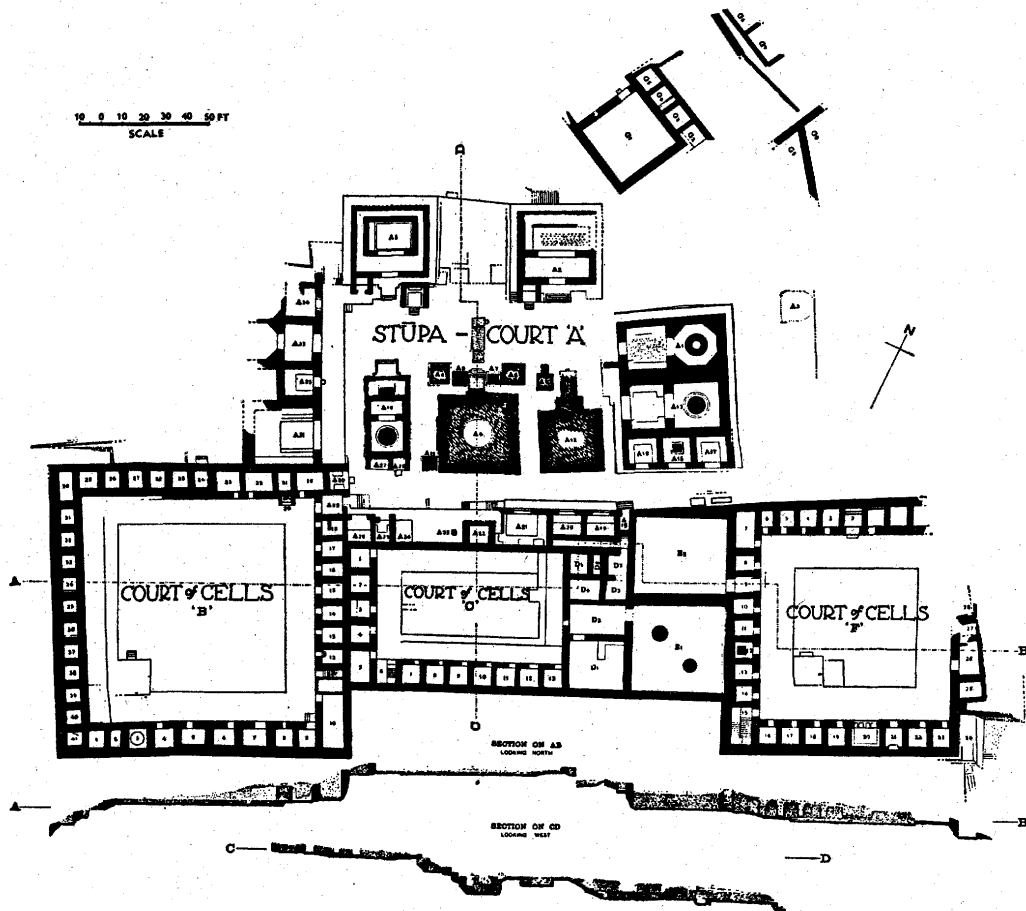
急な斜面を登って水を供給することは、大変な重労働であった筈である。しかしながらここで、マーシャルはその作業を通してこそ仏道における修行の意味を理解しているような説明を加えている。

つまり、そうやって新参の修行者達が水を汲み上げるという行為は疑いもなく価値のある修行や鍛錬となると説く。そればかりでなく、仏塔に参詣にやって来る多くの在家の信者達にとっても、大いに役に立ったのであった。

ここでマーシャルは“the lay-brothers or others who came to pay their devotions at the stūpas”という表現をしている。大乘仏教は北西インド地方で興ってくる。仏道修行を専一に行う出家者とは別の方法で、在家の供養者達の手によって仏塔崇拜が興り、その流れの中から大乘仏教が興ってきた。このような経緯を考えたとき、マーシャルのこのような洞察は仏教の歴史をよく踏まえた思考であると思われる。

さて、カーラワーン寺院の中に入って行こう。図面(図②)を見ると明らかであるが、この寺院は三つのテラスにそれぞれ建物が建てられている。マーシャルは次のように説明している。

From the plan on Pl. 72 it will be seen that the remains on the middle terrace cover an area some 450 ft. from east to west by 270 ft. from north to south, and comprise a stūpa-court (A) on the north, with three large courts of cells (B, C and F) and other monastic rooms or halls to the south. These buildings are not all on the same level, nor are they all of the same age. The court of cells C stands on a terrace 17 ft. above the stūpa-court A, 14 ft. above the court B, and 19 ft. above the court F, A being 3 ft. lower than B and 2 ft. higher than F. Moreover, while the hall E2 connects with the court F on the lower level, the court E, which adjoins it on the south, is on the higher level and connects with the court C. 注③



図② カーラワーン寺院平面図

真中のテラスに残っている遺構の規模は東西約 137m、南北約 82m である。このテラスには北側に塔院 A の一区画があり、その南側に西から僧坊群 B, C, F が造られている。その他に塔院 A の北東寄りの場所に、幾つかの僧院がある。これらの三つの建築群は必ずしも同じレベルの敷地に建てられているわけではなく、また同時代に建築されたわけでもない。僧坊群 C を中心に考えると塔院 A より約 5.2m 高く、僧坊群 B より約 4.3m 高い。さらに又、僧坊群 F と比較すると、僧坊群 C の方が約 5.8m も高い場所に建てられている。塔院 A は僧坊群 B より約 92cm 低く、僧坊群 F より 60cm 余り高い場所に建てられている。又更に、僧坊群 C と F との中間北寄りにある E2 という集会所と見られる建物は、僧坊群 F 同様に、低い位置に造られている。ところが E2 の集会所とほぼ同じ建築面積と見られる E1 は、北面で E2 と隣接しているが、これより一段と高く僧坊群 C に隣接したかたちをとっている。このように、カーラワーンの建築群は、その地勢学的な高低の差がある斜面を利用しながら、内部の建物の用途に従って巧みに考慮しながら建築されていった構造になっていることが分かる。

カーラワーンには三つのタイプの僧院がある。最初のタイプは、僧院 G (図 2) に見られるような小さな菱形の僧院で、塔建築の比較的新しい建物の中にも見られる。小さな菱形のこのような特異なタイプの僧院で、大きな岩の石積みの隙間を埋める小さな石は、余り薄くはない。そのはっきりとした理由は、小石によって水平線を明確に示すためであった。というのも、後代に造られるようになる仕切り壁で分けられた部屋を造る準備作業のような役割を果たしたと考えられる。この種の菱形の僧院は、シルカップ遺跡に存在する寺院建築にも見うけられるような、ペルシャ時代初期のものと同様に区別をつけることが出来る。

次に二番目のタイプの僧院であるが、幾分か漠然とした、特徴のない後世の粗い造りの建築である。このタイプの寺院では、比較的厚い石が形式にとらわれずに使用されている。それらの石材は、仕切り壁で分けられた部屋において、大きな石と石の間を埋める役割を果たしている。

最後に三番目のタイプの僧院であるが、後世に仕切り壁で分けられたタイプの建築である。第一期と第二期のタイプの総てと言ってよいがこれらの建物は、仕切り壁のある僧院の中に拡張するか縮小するかしている。又一方、後世の仕切り壁のある部屋を持つ建造物が、初期の建築遺構の上に建てられたりしたので、その設計を推測するに留まっている。

次にこの寺院の床と天井について、マーシャルは次のように述べている。

In the monastic quarters floors were ordinarily made of beaten earth; in courts or spaces exposed to the weather, generally of river pebbles laid in mud, less commonly of stone flags. Roofs were flat and constructed of wooden timbers covered with a thick layer of clay. Much charred wood from the roofs, which was apparently deodar brought down from the neighbouring hills, and masses of half-burnt clay were found on the floors of the burnt-out buildings.注④

このように、僧坊の住居の床は通常、土で踏み固められている。野外の天候に曝される中庭などのスペースには、土の中に小石を混入して敷設している。敷石だけで舗装されているものほど一般的な方法というわけではない。

次に屋根であるが通常は木材を載せた平坦な造りで、その上を粘土で薄く塗り固めたものである。火災などで大量の炭化した屋根の木材や半分焼け焦げた大量の粘土が、建物の床から発見されている。そこで使用されていた屋根の木材は近くの森から切り出されたヒマラヤ杉であることが明らかとなっている。

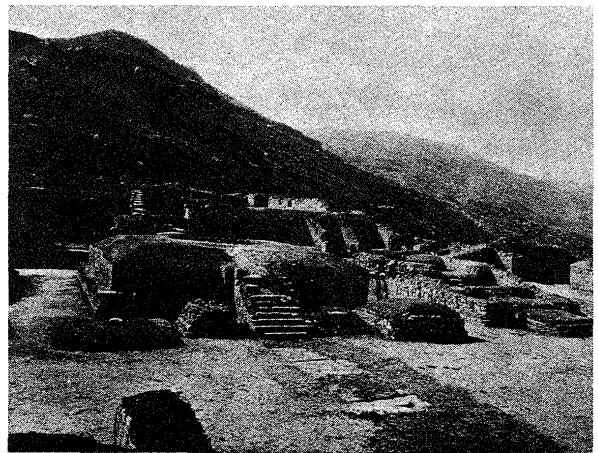
では次に、塔院エリア A について述べていく。図面を見てみよう。このエリア内の建築計画は、通常のものとは少し異なっている。注目すべき特徴として、このような塔院域ではまずメインになるストゥーパが建立されている。それを中心に周囲に従属的なストゥーパや礼拝堂が建立されるというのが通常のプランである。ところがこのカーラワーンでは、主塔 A4（写真①／図③）のスケールは、11.3m×11.3m とやや小ぶりである。このストゥーパの東側に並んで建っている A12 ストゥーパより僅かに大きいだけであり、そして恐らく周囲の建築物の中でも際立って目立つ威風堂々とした建物というわけでもないのである。なぜこのような建て方をしたのかという理由であるが、疑いもなく一つには最初にこの寺院の建築が始まった当初の事実に着目すれば分かることである。つまり、

ダルマラージカ仏塔のような費用のかさむ開化式大塔に対して、寺院内部にストゥーパを備えたアプス型（後陣）の寺院が好まれる傾向にあったことである。しかしもう一つの理由として、カーラワーンの小さな主塔は、今より遥かに小規模であった元々の寺院の大きさに、丁度釣り合っていたということも考えられる。

主塔 A4（写真①）の原型は菱形の石造建築様式として最初期のものであった。後世に、恐らく三世紀あたりに、A4 塔の元からあった壁の広い部分が、記録にはない二回目の修復工事がなされたようだ。更に後に、恐らく四、五世紀頃行われた、石灰岩の切石工事のその基壇の周囲にカンジュール石によるコリント様式注⑤の柱と共に台座の後ろに、古い時代の建築の柱がまだ保存されている。

マーシャルは、このストゥーパで興味深いものを見つけて次のように述べている。

A feature of particular interest in this stūpa is the unusually large size of its circular relic chamber, which is no less than 13 ft. 3 in. in diameter, with walls which start to cove inwards from a height of between 2 and 3 ft. above the floor (Pl. 73, *d*). On the inner face, of these walls were several layers of whitewash, which appeared to indicate that the chamber was repainted from time to time. If this was so, the question arises how the chamber was entered and for what special reason this particular relic chamber was not permanently closed, like the relic chambers of other monuments of this class. A similar problem is presented by the great Kushān stūpa at Mohenjodaro in Sind, the relic chamber of which was also circular and finished off inside with mud plaster. In that case the evidence was not so clear as it is at Kālawān, and I was inclined to take the view that the interior of the drum had been filled in and covered with a dome of the customary pattern. With the discovery, however, of this stūpa at Kālawān, it is necessary to reconsider this view, since it is quite certain that in this case the chamber could not have been filled in. 注⑥



写真① 主塔 A4



SCALE
IN FEET 2 4 6 8 10

図③ 主塔 A4

マーシャルに拠るとこのストゥーパで目立って特徴的な興味深いことは、通常見られないような円形の大きい部屋があることだ。直径4mは下らないだろう。この部屋には壁があって床から約60cmから90cmの高さから内側の奥に向かうように設計されている。これらの壁の内側の表面は、漆喰で何度か塗り重ねられていた。時を経て部屋が修理されていたようだ。仮にこれがそのようなものであるとすれば、疑問が湧いてくる。どのようにして特別の部屋へ入っていったのかということ、そしてどのような理由で、この特異な遺跡の部屋がこのくらいのクラスの他の建築遺構の部屋のように永久に閉じられなかったのかということだ。

やはりこれと似たような問題が、シンド地方にあるモヘンジョ・ダロのクシャーン朝時代のストゥーパで起こっている。遺跡のその特別の部屋は、やはり円形で内部は漆喰で仕上げられている。この場合は、必ずしもカーラワーンのように証拠が明確であるということではない。マーシャルの考えに拠るとストゥーパのドラムの内部を満たした習慣的なやり方で上部をドームで覆ったのではないかというものだ。このカーラワーンのストゥーパの発見によって、特別の部屋は中を埋め尽くさないケースがあるということがはっきりしたので、このような見方もあることに配慮する必要があるだろう。

次にA12ストゥーパについて述べる。このストゥーパはA4ストゥーパの東側に隣接して建てられている。台座の基部が残存しているだけで、他には何もない。台座は、カンジュール石を表面に貼り、仕上げに漆喰を用いている。建築年代は、A4のメインストゥーパとほぼ同時代の建築と考えられる。台座の正面は、コリント式の壁柱の列柱で装飾されている。そしてその列柱は伝統的なトルス注⑦とスコットランド風の形をした塑像の上に載っているというものだ。この基底部の破片などから察して、かつて上部構造を飾っていたコリント式の壁柱の基礎部分や柱頭や柱身、スタッコのレリーフ、傘蓋の軸などが多く出土している。

その他にもこのA12ストゥーパからは多くのスタッコが出土している。例えば、仏像の頭部、修行者像、在家の供養者の三体の頭部、ヴァジュラパラニーのトルソー、在家供養者の折れた二本の指、傘蓋の軸を抱えた女性像などである。同じ場所から、ターバンを巻いたガルータ注⑧の頭の形をした渦巻き型の石製の出土品もある。

次に、A14の仏塔について述べる。この仏塔寺院はA4の主塔の西側に建てられていて、建築年代もほぼ同時代の四角形の石造建築である。その広さは南北約12m、東西約6.5mで、敷地から1.3m高く造られている。最初に、ストゥーパを安置する部屋と玄関が奥へ通じる階段と一緒に造られた。それから古い階段の上にもう一つの通路が付け加えられ、更に新しい階段がこの場所に取り付けられた。この通路は四角い石造建築であったが、これが後世の特徴のないタイプへと繋がっていったのであった。最後に寺院の背後の壁に寄りかかって、石積みで仕切られた二つの小さな寺院が建てられた。

マーシャルは台座の装飾などについて次のように述べている。

The plinth decoration of the building takes the stereotyped form of Corinthian pilasters standing on a moulded base, with a dental cornice above and notched Hindu brackets inserted beneath the architrave. Doubtless this decoration was renovated many times during the four centuries of the building's existence, but it seems to have preserved its original form to the end, and thanks to its good preservation on the western face, it still affords an interesting illustration of characteristic Kushān work. The building does not appear to have been decorated with any figural reliefs in stucco. The floor within this shrine, which is some 3 ft. above the pavement of the courtyard

outside, is composed of pounded kañjūr stone and mud. The small stūpa inside the sanctum is circular in plan and no doubt contemporary with the rest of the building. Unfortunately, little of it has survived and there was no trace of any relic. From the small chapel A27 came the stucco head of an ascetic with long hair coiled on the top (Kn. 275).注⑨

これに拠ると、建物の台座の装飾は、地面の基礎の上にコリント式の型にはまった柱形をして建ててある。その台座は上にギザギザの軒と切り込みが化粧縁の下に差し込まれている。間違いなくこういった装飾は、この寺院が建っていた間の四世紀くらいの中に何度も改築されたと考えられる。しかしマーシャルは、そういったことによってこの A14 塔院の装飾の原型というものが、最後まで保存されたと見ている。特に西面にクシャーン時代の特色のある大変面白い作品が残されていることに興味を覚えている。

もう少しマーシャルの記述を追ってみよう。建築そのものには、スタッコによるレリーフは何も施されては来なかったようである。この寺院内部の床面は、外の地面から 92cm ほど高く造られており、カンジュール石を潰して粉にしたものと土を混合した材料で造られている。中の聖所の小さなストゥーパは円形プランであったが、今は間違いなく後世のものと一緒にになってしまっている。従って残念ながら、その当初のものは殆ど跡を留めていない。これは他の遺跡でも同様である。但しこの寺院の南西の小さな祠堂 A27 から、頭の上に長い髪をグルグルと巻いた修行者のスタッコが出土している。

カーラワーン寺院の中で最も重要な建築は、次に述べようとしている A12 寺院の東側の一角を占めている A1 仏塔を中心とする寺院群である。樋口隆康氏は次のように説明している。

広場の東端には二つのストゥーパ堂と、三つの小室とが一つのブロックをなしている。

そのうちの北端のストゥーパ堂 A1 は前後両室からなっている。前室は方形で左右の両壁にベンチを設けている。後室は八角形で、中心に円形のグリハ・ストゥーパを置いている。径約三・三メートルと高さ七五センチメートルである。中央に円形の舍利室があり、その中にストゥーパ形の石製容器（高さ一六センチメートル）が入っていた。その中には、舍利と共に、「ストゥーパ」の項で述べる、銅の銘板が出た。注⑩

樋口氏が言及しているこの A1 ストゥーパについて、同じくマーシャルも次のように述べてその重要性を指摘している。

Of the buildings which encompass court A on its other sides, the most important by reason of the finds made in it is the stūpa-shrine A1, which, along with the adjoining shrines A13 and the smaller chapels A15, A16 and A17, forms a solid block of buildings on the eastern side of the court.注⑪

この A1 寺院について、マーシャルは続けて次のように説明している。

The oldest part of this block is the shrine A1, which consists of a square antechamber with an entrance on its western side and an octagonal shrine behind, containing a small circular stūpa. This original structure was built of small diaper masonry resembling that used in the main stūpa, with which it was contemporary. Not long after its erection, however, it was laid in ruins, possibly by an earthquake; and when rebuilt, some of the debris appears to have been left where it had fallen, and instead of the new walls being built directly on what remained of the old, they were built on this layer of fallen debris, which in places is as much as a foot thick. Subsequently, the interior of the shrine seems to have been cleared of this debris down to the level of the

original floor. That this reconstruction took place not many years after the first building, is clear from the fact that there is no perceptible difference in the character of the old and the new masonry. 注⑫

この A1 仏塔寺院群の中で、最も古い建築は A1 仏塔 (図④) である。西側に入り口を備えた四角い控えの間があり、奥の間は八角形をしている。その中に、小さな丸いストゥーパ (写真②) を置いている。この特徴的な構築は A4 のメインストゥーパで使われていたものに似た小さな四角い石造建築で建てられている。

しかしながら、建築後間もなくして崩壊した。恐らく、地震によるものと思われる。再建された時に、倒れた場所に残っていた破片を新しい材料の代わりに使用し、崩壊したその上に建築されたと考えられる。

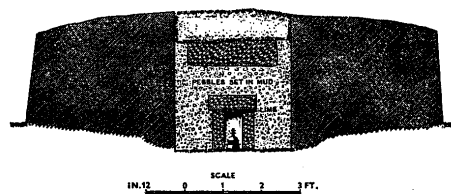
最初にこの寺院が建てられてから、再建されるまでに何年もの年数が経過したわけではないことが次の事実から判明した。即ち、新旧の石造建築の特徴を調べた時には、はっきりと分かる違いは見出せなかったのである。

ここで、樋口氏の記述にあった A1 寺院内から出た出土品について述べていくが、先ずその構造について更に詳細を加える。

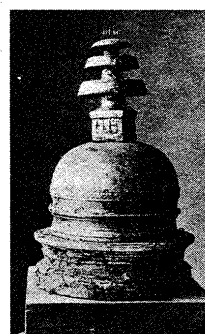
A1 寺院と A13 寺院 (写真③) とは共に周囲の地面より約 74cm 高い所に建築されている。今は既に失われてしまっているのであるが、西側に地面から階段が敷設されていた。両方の寺院とも背面と側面とにテラスが同時期に造られた。というのは、その建物の基礎に対して強い補強部となっていたからである。例えば A1 寺院でいうと、堅い瓦礫の基礎の上にその壁がずっと建てられていたのであるから、それを支える補強部分はどうしても必要であった。更に後世になっても、この補強の作業は続けられたのである。A15 や A16, A17 といった建物を A13 の南壁に対して建設することや A13 の前室内部の壁の基礎部分の周囲にベンチを敷設することでも補強として役立ったのである。(図②)

最後の五回目の修理の時に、A1 寺院の控えの間は新しい切り石で補修された。そして床は近隣の古い建築物にあった青い板ガラス (写真④) で粗く舗装された。

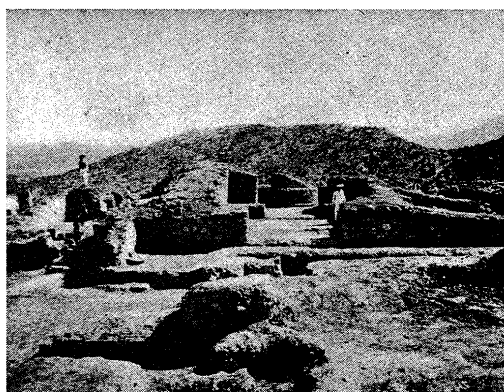
A13 寺院は背面の向こう側より正面の方が狭かったので最初から対称形ということではなかった。このように不規則な形をしていることは、A1 寺院でも同様のことが言える。この建物の東西の長さは 15.3m、南北の幅は約 8m ある。東西の内部のネーブ nave 注⑬の長さは 5.5m、後陣は 5.9m ある。ネーブの北壁と南壁に向かって、二つの丈の低い椅子がかつては設けられていたようだ。しかし後世、二つの椅子の間のネーブの床面の上に、瓦礫が堆積してしまったことは明らかである。そしてその上に、前述したように無計画に青い板ガラスが敷かれてしまった。



図④ 主塔 A1

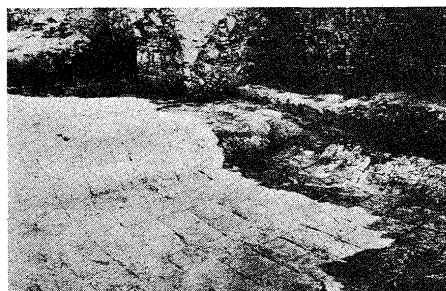


写真② A1 仏塔出土のストゥーパ



写真③ A13 寺院

後陣の床は最初から、板石で舗装されてきたし、今も少しは残っている。後陣には前述した直径 33.6cm、高さ 69cm の丸い小さなストゥーパ（写真②）がある。幸運なことに、その遺跡の部屋と出土品は完璧な状態で発見されたのであった。その部屋は粗雑な造りで、小さな四角いカンジュール石の塊をくり抜いて造ってあった。そして同様の平たい石で上部が閉じられていた。全体の直径は 198cm であった。この上に 275cm の小石の混ざった土の層があり、更にこの上に、石灰岩の重い平板が載せてあった。その部屋の中から、高さ 14.7cm の片岩で造られた小さなストゥーパ型の容器が出土している。その容器の上には四角いハルミカー harmika（平頭）と三層の傘蓋が載っている。容器の表面は、その傘蓋も含めて金箔が貼られていた。その中から、もう一つ直径 5cm の球形の容器（写真⑤）が出てきた。同様に金箔が貼られていて、その他にも次にあげるような品々が出土した。



写真④ 青い板ガラス舗装の A1 仏塔



写真⑤ A1 仏塔出土の丸い容器

直径約 1.4cm の十二枚の薄い金製のロゼット、一枚の直径約 1.2cm の金製の円盤状のもの、十六枚の直径約 1.8cm の銀製のロゼット、更に直径約 9mm と約 1.4cm の二枚の銀製の円盤状のもの。

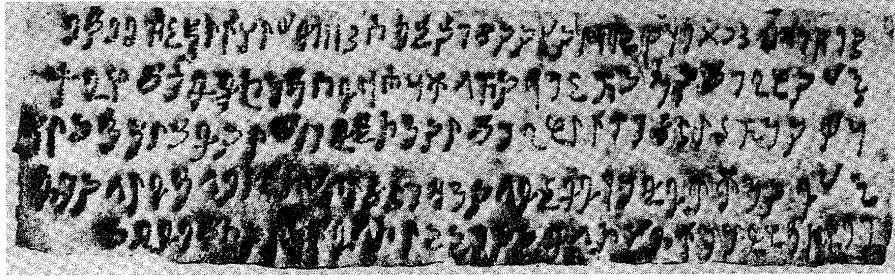
その小さい方の球形の容器の中には、何個かの骨のかけらと一緒に高さ約 1.5cm の一個の円筒形の凹凸のない金製の容器、長さ 1.1cm の黄水晶の円筒ビーズ一つ、長さ 1.1cm のエメラルドの円筒ビーズ一つ、9mm の長さの水晶一つが入っていた。更には、直径 2.5mm～4mm の大きさの六個の真珠、一個の骨製の腐食した球状の玉、一個の直径 6mm の半球のガーネット、直径 6mm の二個の明るいピーコックグリーンビーズ、6mm の長さのトルコ石、約 1cm の長さの薄い金の二枚の板、2mm～6mm の長さの三個の骨の破片などである。

ここからストゥーパ型の銅製の銘板（写真⑥）が出土している。銘板の大きさは約 20cm×6cm で、カロシュティー文字によって刻まれていた。このテキストは、コノー Prof. Sten Konow に拠って判読され翻訳され、“The Royal Asiatic Society” の機関誌に 1932 年に発表されたものである。

次にコノーによるそのカロシュティー文字の部分を上げて、更に翻訳と筆者による和訳文を掲げておく。

(Line 1) Saṃvatśaraye 1 100 20 10 4 ajasa śravaṇasa masasa divase treviśe 20 1 1 1 imeṇa kṣuṇeṇa Caṃdrabhi uasia (l. 2) Dhramṃasa grahavatisa dhita Bhadravalasa bhaya Chaḍaśilae śarira praistaveti gahathu—(l. 3) bami sadha bhraduṇa Ṇamdivadhaṇeṇa grahavatiṇa sadha putrehi Śameṇa Saiteṇa ca dhituṇa ca (l. 4) Dhramae sadha sṇuṣaehi Rajae Idrae ya sadha Jivaṇamdiṇa Śamaputreṇa ayarieṇa ya sarvasti—(l. 5) vaṇa parigrahe raṭhaṇikamo puyaita sarvasvatvaṇa puyae nivaṇasa pratiae hotu. 注⑩

‘In the year 134 of Azes, on the twenty-third—23—day of the month Śrāvaṇa, on this date Candrābhi, the female worshipper (*upāsikā*), daughter of Dharma, the householder (*gṛhapati*), wife of Bhadrāpāla, establishes relics in Chadaśilā, in the stūpa shrine, together with her brother



写真⑥ A1 仏塔出土のカロシュティー文字による銘板

Nandivardhana, the householder, together with her sons Śama and Sacitta and her daughter Dharmā, together with her daughters-in-law Rajā and Indra, together with Jivanandin, the son of Śama, and her teacher, in acceptance of the Sarvāstivādas, having venerated the country-town; for the veneration of all beings; may it be for the obtainment of Nirvāṇa.' 注⑤

即ち、

アゼスの 134 年、シュラヴァーニャ月の 23 日にバドゥラパーラーの妻でダルマの娘であり女性供養者である優婆夷のカンドゥラビーが、彼女の兄弟ナンディヴァルダナ、息子達シャーマとサチッタと娘ダルマー、義理の娘達ラージャーとインドラ、シャーマの息子ジーヴァナンディンと彼女の先生と共にチャダシラーの仏塔の中に舍利を奉納した。説一切有部の受用によって、町の供養、一切の生きとし生けるものが涅槃に達することを願って。注⑥

というものである。

この銅製の銘板に関して、ダルマラージカの G5 祠堂からも同様の銀の巻物の銘文が出土していて興味深い。それは次のようなものである。

アゼスの 136 年アーシャーダー月の 15 日に、バクトリア人のインタフェルネスの後裔でノアチャの町の住人であるウラサカが、世尊の舍利をタクシャシラのダルマラージカのストウパの菩薩堂に祭った。大王、王中の王、天子の子、クシャーン人の健康のために、一切諸仏のために、辟支仏、阿羅漢、一切覚者、両親、友人、助言者、親戚、血縁者の供養のために、彼自身に健康を与えたまえ、汝が涅槃に至ることが出来るように。注⑦

このアゼスという年号が問題である。マーシャルに拠ると注⑧、ダルマラージカストウパの G5 祠堂建立の二年以前に、これが建立されたとしている。そうしてその ayasa という語は、ギリシャ王のアゼス Azes のカロシュティー文字と同様の表現であり、aya の所有格であるというのがマーシャルの解釈である。

いずれにしても、カーラワーン遺跡の祠堂などが、このように在家の有力な信者や商人などの供養者の手によって寄進され、手厚い保護を受けながら存続していた実態は大変興味深いものがある。

〈注〉

① 『TAXILA』 Vol. I J. Marshall Motilal Banarsidass 1975 年 p. 322

② 注①に同じ p. 322

③ 注①に同じ p. 322

④ 注①に同じ p. 323

⑤ コリント様式とは、「ギリシア建築の 3 オーダーの一。イオニア式オーダーの変形。アカンサスの葉をモチーフとした柱頭が特徴的で、他のオーダーに比べて装飾的意図が強い。」(『建築大辞典 第 2 版』彰国社

編 彰国社 1993年6月 p. 593)

- ⑥ 注①に同じ pp. 323~324
- ⑦ トルス torus 円柱基の大玉縁
- ⑧ ガルーダ Garuda 「ヒンドゥー教系美術特有の半神的性格を帯びた生態モチーフ。ヒンドゥー教の三大神の一つであるヴィシュヌの乗物。聖鳥として崇拝の対象となっている。仏化され八部衆の一神、迦楼羅となる。」(注⑤に同じ p. 322)
- ⑨ 注①に同じ pp. 325~326
- ⑩ 『ガンダーラの美神と仏たち』樋口隆康 日本放送出版協会 昭和61年5月 p. 65
- ⑪ 注①に同じ p. 326
- ⑫ 注①に同じ p. 326
- ⑬ ネーブ nave とは寺院の入り口から祭壇にかけての中央部分
- ⑭ 注①に同じ p. 327
- ⑮ 注①に同じ p. 327
- ⑯ 注⑯の筆者訳
- ⑰ 注⑩に同じ p. 99
- ⑱ 注①に同じ p. 328

<図>

- ① タキシラ全図 “MAP OF TAXILA” 『TAXILA』 Vol. III J. Marshall Motilal Banarsidass 1975年 Plate 1
- ② カーラワーン寺院平面図 図①資料 Plate 72
- ③ 主塔 A4 図①資料 Plate 73 (d)
- ④ 主塔 A1 図①資料 Plate 73 (c)

<写真>

- ① 主塔 A4 『TAXILA』 Vol. III J. Marshall Motilal Banarsidass 1975年 Plate 74 (a)
- ② A1 仏塔出土のストゥーパ 写真①資料 Plate 80 (g)
- ③ A13 寺院 写真①資料 Plate 76 (a)
- ④ 青い板ガラス舗装の A1 仏塔 写真①資料 plate 77 (c)
- ⑤ A1 仏塔出土の丸い容器 写真①資料 Plate 80 (c)
- ⑥ A1 仏塔出土のカロシュティー文字による銘板 写真①資料 Plate 80 (a)

(そうだ けいこ 文化創造学科)